INFORMATION [2025.7—2025.10]

SCHEDULE

	歴史展示室	常設展示室1	常設展示室2	常設展示室3	常設展示室4・5	特別展示室
7月	かがわ今昔 ～香川の歴史と文化～	掌の美 7/13	昭和の記憶と美術 7/23	弘法大師空海の生涯と事績	昭和の香川 7/23	小沢剛の讃岐七不思議
		7/19			第49回全国高等学校総合文化祭(7/27～31)	
8月		夏だ！旅に出よう！ 8/31	8/6 ワールドツアー		8/6 ベトナム現代美術展 8/31	8/9
9月		9/5 栗林荘を歩く			9/5 夜をたのしむ	
10月		10/19	11/3		10/19	10/13

臨時休館期間：7/24～7/26、8/1～8/5、10/24～10/29

夏休み子どもミュージアムイベント

1. 食文化体験講座「戦争中は何を食べていたの？ーすいとん作りー」
有料・要事前申込

食の体験を通して、香川の歴史や文化に親しむ講座です。今回は小麦粉を練ってゆでる「すいとん」作りから、戦時中の食文化を体験します。

日　　時：8月11日(月・祝)　10:00～12:00
会　　場：地下1階　実習室
対　　象：小学生と保護者
参 加 料：300円
定　　員：18名（1組につき、小学生2名・保護者1名まで）
（申込多数の場合は抽選）
募集期間：7月5日(土)～7月26日(土)当日必着

2. ミュージアムからの挑戦状～旅をしながらミッションをクリアせよ！
要観覧券・申込不要

君にはこのミッションがクリアできるか!?ミュージアムの展示に隠された謎やミッションに挑戦しながら、冒険の旅に出よう！

日　　時：8月17日(日)　13:30～14:30
会　　場：2階　西ロビー集合　常設展示室1、その他展示室ほか
対　　象：小学生(小学校3年生以下は保護者の同伴が必要)
定　　員：15名程度

3. 行ってみたいな宇宙旅行　**要観覧券・申込不要**

旅に関する展示「アート・コレクション ワールドツアー」を鑑賞後、将来もし宇宙旅行にいけたなら…と想像しながら作品を作ります。

日　　時：8月24日(日)　10:00～11:30
会　　場：2階　西ロビー集合　1階図書コーナー、常設展示室2
対　　象：小学生(小学校3年生以下は保護者の同伴が必要)
定　　員：15名程度

4. 特別展「小沢剛の讃岐七不思議」関連 小沢さんと7つのフシギにチャレンジ！
有料・要事前申込

アーティストと一緒に特別展をめぐりながら、作品づくりに取り組むワークショップです。

日　　時：8月23日(土)　13:30～15:00
会　　場：2階　特別展示室ほか
講　　師：小沢剛氏
対　　象：小学生(小学校3年生以下は保護者の同伴が必要)
参 加 料：500円(保護者は別途特別展観覧券が必要)
定　　員：15名(申込多数の場合は抽選)
募集期間：7月5日(土)～7月26日(土)当日必着

■1・4の申込方法
往復はがき、「香川県電子申請・届出システム」(※)を利用したインターネットから。1回2名まで申し込み可。往復はがきの場合は、氏名(ふりがな)、学年、住所、電話番号、イベント名を明記してください。
申 込 先：〒760-0030 高松市玉藻町5番5号 香川県立ミュージアム学芸課

※「香川県電子申請・届出システム」を利用する場合
香川県立ミュージアムWEBサイトの「関連リンク」から「香川県電子申請・届出システムのページへ」をクリックしてください。

ナイトミュージアム

特別展「小沢剛の讃岐七不思議」会期中の以下の10日間は、開館時間を午後8時まで延長します(入館は午後7時30分まで)。

日　　程：8月9日(土)、10日(日)、11日(月・祝)、16日(土)、23日(土)、30日(土)、10月4日(土)、11日(土)、12日(日)、13日(月・祝)

イサム・ノグチ「AKARI」ライトアップ　**無料**

岐阜提灯との出会いを機に生み出した、光の彫刻「AKARI」を夜間開館時間中、特別点灯します。ノグチの代表作「アーケイック」の周辺で灯る「AKARI」をご堪能ください。

会　　場：1階　図書コーナー
点灯時間：夜間開館日の17:30～20:00

シャトルバス“七不思議行き”を運行します！　**無料・申込不要**

夜間開館実施日に合わせて、高松港とミュージアムとの間でシャトルバスを運行します。

運行日	8月	9、10、11、16、30日
	10月	4、11、12、13日
運行時間（予定）	高松港→ミュージアム	①16:00、②16:30 ③17:00 ④17:30 ⑤18:00 ⑥18:30 ⑦19:00
	ミュージアム→高松港（JR高松駅経由）	①16:15 ②16:45 ③17:15 ④17:45 ⑤18:15 ⑥18:45 ⑦20:00

＊最新情報はWEBサイトをご覧ください。

瀬戸内海歴史民俗資料館のイベント　**無料・申込不要**

重要文化財指定記念事業　れきみんナイトミュージアム

屋上展望台から見える美しい瀬戸内海の夕景を楽しんでいただくとともに、建築をライトアップし、敷地内の灯台にあかりを灯すほか、館内に船舶灯を展示するなど、いつもとは異なる夜の資料館を演出します。

日　　時：8月29日(金)、30日(土)17:00～20:00
会　　場：瀬戸内海歴史民俗資料館
★JR高松駅⇔会場において、バスによる送迎(無料)を行います。【要予約】
＊詳細・申込方法等については今後お知らせします。WEBサイトをご覧いただくか、お電話にてお問合せください。

県展の開催時期が秋になります！
第89回香川県美術展覧会は会期を変更して開催します。それにともない、作品募集期間も変更となりますのでご注意ください。
開催要項配布期間：7月下旬～
※香川県電子申請・届出システムで出品申込書が作成可能です
会　　期：第1期(絵画・立体)11月15日(土)～11月24日(月・休)
第2期(工芸・写真)11月28日(金)～12月7日(日)
第3期(書)　12月11日(木)～12月20日(土)
※詳細は決まり次第当館WEBサイトにてお知らせします

カフェポット ミュゼ
くつろぎのひとときに、カフェポット ミュゼをご利用ください。特別展期間限定のメニューもご用意しています。
営業時間：9:00～17:00(オーダーストップ16:30)
夜間開館の日は9:00～20:00
(オーダーストップ19:30)

ミュージアムショップ
1階ミュージアムショップでは、当館オリジナルグッズも販売しています。
営業時間：9:00～17:00
夜間開館の日は9:00～20:00

香川県立ミュージアム
〒760-0030 高松市玉藻町5番5号
TEL.087-822-0002(代表) FAX.087-822-0043
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/kmuseum/index.html

分館 **瀬戸内海歴史民俗資料館**
〒761-8001 高松市亀水町1412-2
TEL.087-881-4707　FAX.087-881-4784
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/setorekishi/index.html

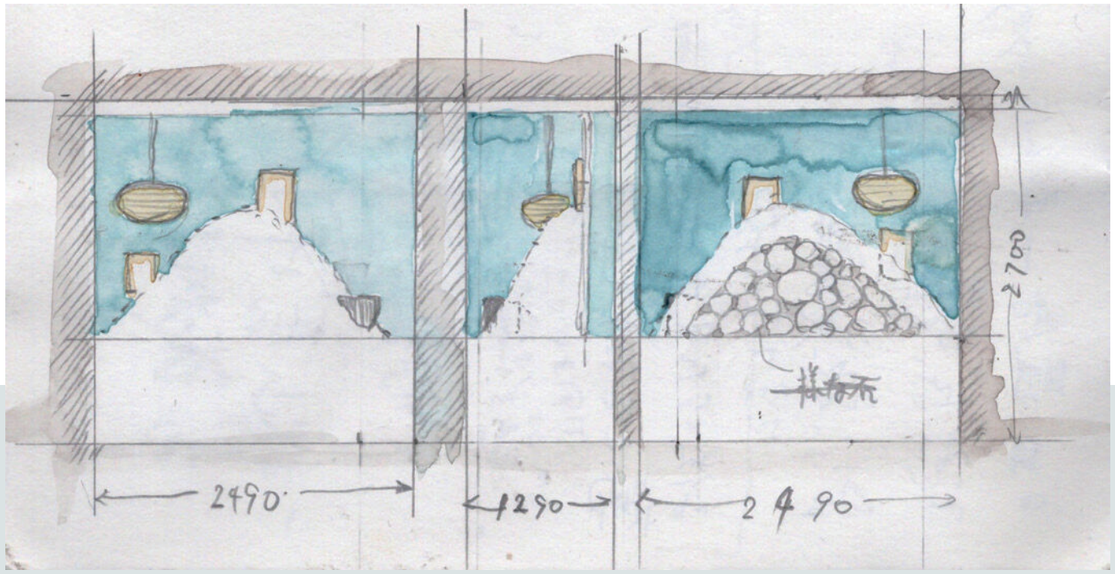
分館 **香川県文化会館**
〒760-0017 高松市番町1丁目10番39号
TEL.087-831-1806　FAX.087-831-1807
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/kmuseum/bunkakaikan/kfvn.html

日時・内容については変更になる場合があります。最新情報は当館WEBサイトをご覧ください。

●発行日 令和7年(2025)7月4日　●編集・発行 香川県立ミュージアム　●印刷 株式会社ムレコミュニケーションズ

NEWS
THE KAGAWA MUSEUM

香川県立ミュージアム ニュース
2025 夏号
VOL.65



CONTENTS

特別展　「瀬戸芸美術館連携」プロジェクト
小沢剛の讃岐七不思議

展示室だより　常設展 夏休み子どもミュージアム　夏だ！旅に出よう！
常設展 栗林公園開園150年記念　栗林荘を歩く
常設展 ワールドツアー
常設展 夜をたのしむ

収蔵品紹介　終戦直後の手紙

調査研究ノートVol.50　高松城東之丸跡の石垣を探る

れきみんだより　「家終い」、資料収集の現場から

小沢剛の展示構想ドローイング

特別展「小沢剛の讃岐七不思議」のために小沢が描いたもの。香川県立ミュージアムの収蔵品や、香川県(讃岐)に関係する情報などから着想を得たイメージを具体化するための準備段階のものであるが、それ自体が様々な見方を喚起する、ひとつの作品となっている。ドローイングがなにを意味しているのかは、展覧会会場で確認してほしい。

「瀬戸芸美術館連携」プロジェクト

特別展「小沢剛の讃岐七不思議」

Tsuyoshi Ozawa : The Seven Wonders of Sanuki

2025年は、大阪・関西万博、瀬戸内国際芸術祭2025とビッグイベントが開催され、国内外からの多くの観光客が香川県にも訪れています。そんななか、香川県立ミュージアムでは、夏から秋にかけて、美術家・小沢剛の個展として、特別展「小沢剛の讃岐七不思議」を開催します。当館における現代美術作家の個展は初めてであり、新しい試みでもあります。

七不思議とは？

小沢は、これまで「金沢七不思議」（2008年）、「広島比治山七不思議」（2009年）といった作品を制作しています。この「七不思議」とは、小沢の視点から「見るべき、あるいは知っておくべきモノ・コト」を選んだという意味になります。

香川県ゆかりの作品・資料（モノ）と、様々な情報（コト）を「七不思議」として選び、現代美術の様々な方法を用いて作品へと落とし込んでいく。そして、その着想源となった収蔵品と、小沢の作品を組み合わせて展示することで、香川県の歴史・美術・民俗に新しい見方を提供したい。そんな目指すべき方向性が、当館の学芸員および、ゲスト・キュレーターである三木あき子も交えた対話の中で、共有されました。

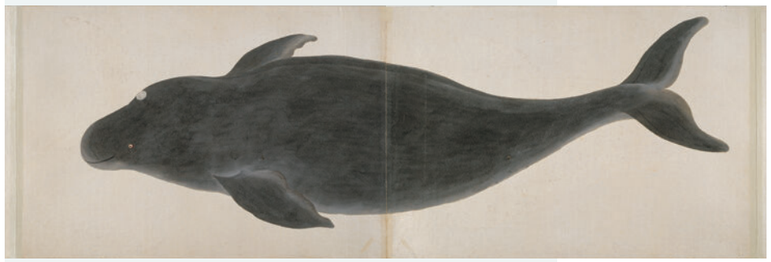
「衆鱗図」ワークショップの様子

当館での収蔵品調査や県内でのリサーチを重ねながら見出された「七不思議」。インスタレーション、写真、オブジェ、映像、焼き物、絵画と多岐にわたる作品の全体像は、会場で見てのお楽しみとなります。当館の歴史資料や美術作品だけではなく、瀬戸内海歴史民俗資料館の民俗資料など多様なものが一堂に会します。ここでは小沢が選んだ収蔵品をピックアップしながら、その一部をご紹介します。

これは見逃せない！「衆鱗図（しゅうりんず）」

当館の中核的なコレクションのひとつは、江戸時代、高松藩主であった高松松平家に伝来した資料群です。そのなかでも、近年注目されているのが香川県指定有形文化財「高松松平家博物図譜」のなかの「衆鱗図」全４帖です。江戸時代に博物学の流行を受けて、５代藩主の頼恭（よりたか）の命で、魚類を中心とした「衆鱗図」をはじめ、鳥、植物を描いた博物図譜（現在の図鑑に当たるもの）が作られます。制作には平賀源内の関与も推測されています。実際の魚などを見ながら描かれたと考えられ、その精巧さから多くの写しも生み出されました。本展では、前期・後期にわたって２帖ずつを広げて約30図を展示し、そこに描かれた様々な海の生きものをご覧いただけます。

「衆鱗図」に触発された小沢は、城東保育園（高松市）の協力を得て、園児たちと「衆鱗図」を模写するワークショップを実施しました。そこでできあがった絵を見ながら、さらに小沢自身が描く。それは、まるで「衆鱗図」が写されてきた歴史をたどり直すような試みでもあります。遊び心も隠されたその大作と、「衆鱗図」の共演をご期待ください。



「衆鱗図」第４帖　（スナメリ）

「衆鱗図」第１帖　石割鯛（左）　炭焼鯛（右）

平賀源内が故郷に残した足跡「源内焼（げんないやき）」

弘法大師空海と並んで、香川県を代表する著名人といえば平賀源内です。志度（現・さぬき市）出身の源内は、本草学（博物学）の知識をベースとしながら、手掛けた分野は発明、鉱山開発、油彩画のほか、戯作や浄瑠璃まで、まさに“奇才”というにふさわしい活躍をします。

そのなかで、とりわけ讃岐とかかわりが深いのが、源内焼です。源内焼は、源内が指導し、志度の陶工が始めたものです。褐色のものもありますが、中国の三彩陶器を参考にした緑を基調とした色彩と、それまでにない独特の図案が特徴です。なんと、世界地図をモデルにしたものがあるのです。

小沢は、自分でも源内焼のような焼き物を作りたい！と動き出しました。さて、小沢版源内焼の図案とはいったいどんなものになったのでしょうか？会場で作品を確かめてみてください。

初展示の希少資料「縛り人形」

高松松平家に伝来した一風変わった資料も小沢の目に留まりました。今回初めて展示する「直指公御流儀秘事縄雛形（じきしこうごりゅうぎひじなわひながた）」です。手のひらサイズの人形に縄がかけられている姿は、なにも知らないで見ると少しショッキングです。当館では「縛り人形」と呼んでおり、これらの人形は、敵を捕らえる捕縛術（ほばくじゅつ）という武術の伝授のために作られたと考えられています。江戸時代には、身分などによって異なる縄のかけ方をしていたため、木型や紙型でその方法を示したものがいくつか残っています。ただ、この資料のように本格的な人形で立体的に表現したものはあまり例がありません。

小沢は、この人形にまったく新しい光を当てて撮影し、写真作品を制作しました。まるで怖い夢のなかのような世界をご堪能いただけると思います。

県内作品もあわせて讃岐の魅力を再発見

小沢の作品は、香川県では2か所に常設展示されています。ひとつは、坂出市の「讃岐醤油画資料館」（1999年）で、もうひとつは直島町のヴァレーギャラリーに設置された「スラグブッダ88」（2006年）です。さらに、今年は瀬戸内国際芸術祭2025にも、「昭和40年会」というグループで参加しており、男木島に作品が展示されています。特別展とともに県内各地の小沢の作品にも触れることで、讃岐の魅力を新たに発見する機会となるはずです。

（専門学芸員　黛 友明）

源内焼　アメリカ図皿

直指公御流儀秘事縄雛形

源内焼の調査

「縛り人形」の写真撮影

展覧会情報

特別展｜小沢剛の讃岐七不思議

会　　期：8月9日(土)－10月13日(月・祝)
会　　場：特別展示室
開館時間：午前9時～午後5時（入館は閉館の30分前まで）
　　＊夜間開館　午後8時まで
　　8/9、10、11、16、23、30、10/4、11、12、13
休 館 日：月曜日（8/11、9/15、10/13は開館）、8/12、9/16
観 覧 料：1,200円、前売・団体（20名以上）1,000円
※瀬戸内国際芸術祭パスポート提示で団体料金（8/9～31、10/3～13）
※高校生以下、県内在住の65歳以上、障害者手帳・特定医療費（指定難病）受給者証等をお持ちの方とその介護者は無料

小沢剛
美術家 1965年生まれ
千葉県在住

東京藝術大学在学中から、風景の中に自作の地蔵を建立し、写真に収める「地蔵建立」を開始。1993年より牛乳箱を用いた超小型移動式ギャラリー「なすび画廊」や「相談芸術」、99年には日本美術史の名作を醤油でリメイクした「醤油画資料館」や、2001年より女性が野菜で出来た武器を持つポートレート写真のシリーズ「ベジタブル・ウェポン」、13年より歴史上の実在する人物を題材に、事実とフィクションを重ね合わせ、物語を構築する「帰って来た」シリーズを制作。

常設展示室1

夏休み子どもミュージアム

夏だ！旅に出よう！

7/19(土)～8/31(日)

7月・8月は夏休み！夏になると住むまちを離れ、遠くへ旅した記憶を思い出す大人も多いのではないでしょうか。子どもにとっては、行ったことのない場所へ行く機会が増える季節かもしれません。

本展では、旅にまつわる資料のなかでも特に、香川の観光地を紹介するガイドマップや、鉄道・船の路線図、観光地を写した絵はがきなどを紹介します。これらを見ると、鉄道や船が主流だった時代から屋島・栗林公園・琴平などが主要な観光地だったことや、今はなき塩田が香川を象徴する風景だったことなどがわかります。

かつての香川県の観光地はどのような景色で、その観光地までどのように移動していたのでしょうか。大人にとっては懐かしいものもあると思いますので、ぜひみなさんで一緒に、今と同じところや変化したところを話しながら見つけてみてください。

（専門職員　横山 達磨）

ミュージアム・トーク：8/11(月・祝)、8/31(日)
各回14:00～(30分程度)

香川県観光・産業地図　昭和25年(1950)

宇高航路60周年記念　連絡船用グリーン券　昭和45年(1970)

常設展示室1

栗林公園開園150年記念

栗林荘を歩く

9/5(金)～10/19(日)

特別名勝に指定され、毎年多くの人びとが訪れる栗林公園。近年は外国人観光客も増え、人気は世界へと広がっています。栗林公園は、江戸時代の大名庭園・栗林荘を引き継いでいます。

その栗林荘の見どころを紹介した江戸時代の公式ガイドブックが「栗林荘記」。5代高松藩主松平頼恭は、自らも鉈をふるって栗林荘の整備を行い、各所の名前を整えました。その完成記念に、儒者の中村文輔に書かせたのが「栗林荘記」で、栗林荘の魅力がいっぱい詰まっています。園内の名所・名勝を余すことなくとらえた、魅力に満ちた文章は、読むと栗林荘を歩いているような気分を楽しむことができる内容になっています。

本展では「栗林荘記」の内容を紹介しながら、江戸時代の栗林荘を楽しみます。

（主任専門学芸員　御厨 義道）

ミュージアム・トーク：9/6(土)、10/11(土)
各回14:00～(30分程度)

栗林図(部分)　江戸時代

栗林荘記　延享2年(1745)

常設展示室2 アート・コレクション

ワールドツアー

8/6(水)～11/3(月・祝)

世界には多くの国や地域があり、それぞれに自然の眺めや、その土地に伝わる生活や習わしがあります。これまで画家たちは、世界の風景や生活に魅了され、作品に描いてきました。本展では、香川ゆかりの作家を中心に世界の風景等が描かれた絵画作品を展示します。作品を通して世界を旅してみませんか？

（主任学芸員　日置 瑶子）

柏原覚太郎「トレド風景」　昭和40年(1965)

ミュージアム・トーク：8/24(日)、9/13(土)、10/13(月・祝)
各回14:00～(30分程度)

常設展示室4・5 アート・コレクション

夜をたのしむ

9/5(金)～10/19(日)

夜をテーマにした作品には独特の心地よい静けさがあります。夜に活動する代表的な動物、ふくろうが登場する作品も、本展の見どころのひとつ。観る人それぞれの「夜」の記憶や感情に呼びかける、詩的で幻想的な空間をお楽しみください。

（専門職員　岡本 由貴子）

大西忠夫「待宵」　昭和59年(1984)

ミュージアム・トーク：9/15(月・祝)、10/19(日)
各回14:00～(30分程度)

収蔵品紹介

終戦直後の手紙

2025年は終戦80周年の節目に当たります。

本資料は、終戦から間もない昭和20年(1945)10月11日に、小学校の担任の先生から児童へ宛てて出された手紙です。

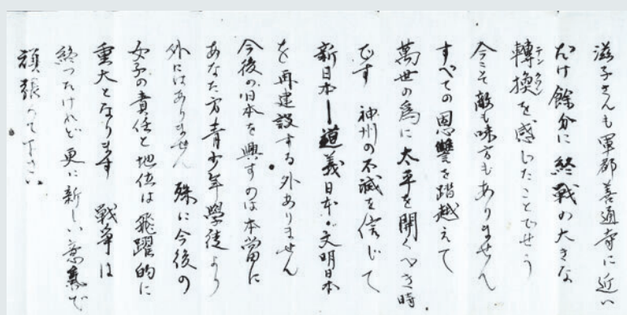
高松市花園町に住んでいたこの児童は、昭和20年7月4日未明の高松空襲で家が全焼したため、母親の実家がある善通寺町(当時)へ転居しました。その後、母親が先生に無事を知らせる手紙を送り、それに対する返信の手紙です。

手紙には、突然戦争に負けてしまい「一時はどうしてよいか分からず生きているのさえいやになって」ぼんやり過ごしたと書かれており、先生が価値観の転換に戸惑い、虚無感に襲われていた様子がうかがえます。しかし、次第に落ち着いて来たといい、今後の日本を再建するのは「あなた方青少年学徒」であるから「新しい意気で頑張って下さい」と続きます。

敗戦に際しての心情や、将来への希望が率直に記され、終戦直後の人びとの心情を垣間見ることのできる貴重な資料です。

常設展「昭和100年記念　昭和の香川 一人びとの暮らしとまちの変化」(会期：6/6(金)～7/23(水))にて展示します。

（学芸員　芝野 有純）


終戦直後の手紙(部分)　昭和20年(1945)

調査研究ノートvol.50

高松城東之丸跡の石垣を探る

Notes for Research

香川県立ミュージアムとレクザムホール（香川県県民ホール）は高松城東之丸の跡地に位置しており、それぞれの敷地内で石垣を見ることができます。ここでは、石垣の見どころを紹介しつつ、その来歴について考えてみます。

図1　当館東玄関の石垣

地上に残る石垣

天正16年（1588）から生駒親正（いこまちかまさ）によって築城された高松城は、寛永19年（1642）に松平頼重（よりしげ）が城主となった後も改修・拡張がなされました。東之丸は寛文11年（1671）ごろから松平家が拡張した曲輪（くるわ）であり、延宝5年（1677）ごろには完成していたと考えられています。

当館の東玄関では、香川県歴史博物館（当館の前身）の建設にともなって発掘された東之丸の石垣を見ることができます（図1）。石垣の中央部分には横一列にそろった目地（めじ）が見て取れます。この目地のあたりから下が出土部分で、それより上部は往時の高さに復元したものです。この石垣は、江戸時代後期の文政5年（1822）に「はらみ出し」と呼ばれる歪みを引き起こしたため、幕府に積み直しの願いが出された箇所のひとつであり、その際に修復された部分が混在していると思われます。

また、レクザムホール内には東之丸の北側・東側および艮櫓（うしとらやぐら）跡櫓台の石垣が残っています。特に北側と艮櫓跡櫓台は後世の修理の跡があまり見られず、石を割った際の楔（くさび）の跡（矢穴（やあな））や、表面を滑らかに仕上げた際のノミの削り跡を見ることができます。海側の表面に化粧仕上げを施す点は、登られにくくするという防衛上の理由のほか、海からの見栄えを良くしたいという、瀬戸内海を監視する「海城」らしさも感じられます。

レクザムホールに残る地下石垣

レクザムホール地下の遺構保存庫では、東之丸が作られる以前に海岸の護岸として築かれた石垣を見学することができます。大きく4段階に分けて築かれたこと、東之丸の築造にともなって埋没したことが発掘調査でわかっています。

生駒時代末期、寛永15～16年（1638～39）ごろの高松城を描いた「高松城下屋敷割図」（高松市指定有形文化財、高松市歴史資料館蔵）では、この場所には「捨石（すていし）」と注記された石が

図2　レクザムホール地下の遺構保存庫

波打ち際に沿ってまばらに描かれるのみで、石垣はまだ築かれていません。捨石は敵船の接岸の妨害や、波消しのために置かれていたのでしょう。一方、松平頼重の高松入城後間もない時期を描いたとされる「高松城下図屏風」（図3）では、遺構保存庫のある場所に護岸が描かれており、4段階に分かれた地下石垣のどれかを描写していると思われます。以上のことから、遺構保存庫にある地下石垣は高松松平家が入城した頃から東之丸築造までの30年ほどの間に築かれ、何度も手が加えられたことになります。松平時代初期に城の周辺の整備が段階的に行われていく様子がうかがえます。

このように当館周辺に残る石垣はこの土地がたどって来た歴史を物語っています。ご来館の際には、ぜひそれぞれの石垣にも注目してみてください。

（学芸員　藤井 俊輔）

図3　香川県指定有形文化財「高松城下図屏風」（部分）

参考文献
香川県教育委員会編『高松城東ノ丸跡発掘調査報告書』
（香川県教育委員会、1987年）
香川県埋蔵文化財調査センター編
『香川県歴史博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　高松城跡』
（香川県教育委員会/香川県埋蔵文化財調査センター、1999年）

瀬戸内海歴史民俗資料館
れきみんだより

「家終い（いえじま）」、資料収集の現場から

空き家の解体がすすむ現場での資料収集調査

蔵内にそのままのこされた器物類

空き家の「家終い」に伴う寄贈照会

先日、新聞紙上に「老朽危険　除去支援1.5倍　県、空き家対策加速へ」（四国新聞2025年4月7日付）の記事が出ました。県による老朽危険空き家の除去支援や対策強化を報じたもので、記事では県内の「空き家率」は過去最高の18.5%、全国平均より4.7ポイント高い全国ワースト10位だと伝えています。

瀬戸内海歴史民俗資料館（以下、当館）への「家終い」に伴う寄贈照会も年々増加傾向にあります。10数年前までは技術革新や生活変化により使用しなくなった特定の道具の調査依頼が多かったものが、近年は家や蔵、倉庫などにモノがそのままのこされた状態での調査依頼が多く、「役立つものがあれば何でも寄贈します」という話が急増しています。その多くは長年空き家だった家です。

祖父母世代や親世代の実家を離れ、異なる場所で新居を構え、祖父母や親たちが亡くなって空き家となっていた家やそこにのこされた動産・不動産の処分を、実家を知らない次の世代に先送りできないと、「家終い」にふみ切る人たちが増加しているのです。団塊世代の高齢化も一因と言えるかもしれません。

博物館の収蔵庫問題

一方、昨年は博物館の収蔵庫問題が大きくクローズアップされた年でもありました。当館で開催した企画展「『たくさん集める』からわかること」の紹介とともに掲載された「解説　集めた民具 博物館『満杯』」（読売新聞2024年12月11日付）のなかで、法政大学の金山喜昭教授（当時）が行った全国の公立博物館500館の収蔵庫調査の結果、回答のあった約320館の7割以上の館でほぼ満杯か入りきらない状態との回答があったと報じています。当館も例外ではなく、開館50年を経て既存の収蔵庫は満杯となり、部屋の役割分担の変更により使用しなくなった居室を活用するなどして、収蔵面積の確保に努めてきましたが、それも限界に近づきつつあります。

資料収集の現場と家終い展

調査では、隣で重機による空き家の解体が進むなか、限られた時間で、その家にのこされたさまざまな生活財から「家や地域を物語るモノ」「社会や時代を物語るモノ」などの観点で選択・抽出をしていきます。そこで暮らした方々の生業や家の歴史などを聞き取りながら、のこされたモノたちを一点一点見つめていきます。また、既収蔵資料の情報も睨みながら、これまで収集されたことがないモノ、収集してきた資料の関連・比較資料として収集すべきモノなども考えながら作業をしていきます。もちろん、収蔵スペースの問題も頭をよぎります。決して手当たり次第に収蔵しているわけではなく、むしろ、抽出をあきらめたことで、その後廃棄されてしまったモノが大半で、現場では難しい選択を迫られています。「家終い」展では、それら抽出・整理中の資料について、なぜ、その資料を選択したのかなどを中心に紹介します。

地域の生業や暮らしは当館が開館した50年前とは大きく変化し、高度経済成長以前のような第一次産業中心ではなくなり、人々をとりまく道具やその素材も大きく変わりました。地域を構成する人たちの生業や生活も多様で、暮らしをとりまく道具の変化も早くなっています。だからこそ50年後、100年後、未来を見すえての資料収集のあり方を日々研究しながら対応していく必要があると考えています。

（瀬戸内海歴史民俗資料館　専門職員　田井 静明）

展覧会情報

瀬戸内ギャラリー第17回企画展
「家終い ―のこされたモノが語る家族・地域の記憶―」
7月5日（土）～8月31日（日）
「終活」等によって空き家や生活用具を処分する「家終い」に伴う資料収集現場において、どのようなモノを資料として選択収集しているかを紹介します。